

京都大学電子図書館システムの現状

朝 妻 三代治

1. はじめに

平成10(1998)年1月に動き出した「京都大学電子図書館システム」が、この11月で1年11ヶ月を経過しました。徐々に充実しつつあるこのシステムに、構想当初から関わった多くの皆様方の努力に心から敬意を表します。

「机の上に京都大学」「京都大学エンサイクロペディア」つまり、机の上にネットワークに繋がったコンピュータがあれば、世界中から京都大学が見えるという発想は大胆ですが、見学者の方々に説明をする度に「なるほど」と実感しています。

諸先輩達に感謝の意を込め「京都大学電子図書館システムの現状」を報告いたします。

京都大学百年史をインターネット公開

平成10(1998)年 電子図書館システム稼働業務システム、オープンシステムに移行

3. 京都大学電子図書館システムのコンセプト

電子図書館システムは4つのコンセプトで成りたっている。

- 1) 情報の発信(京都大学の情報を世界中へ)
- 2) 情報の配信(学術情報を学内構成員へ)
- 3) 電子出版サポート(学内出版物を)
- 4) 高度な検索・ナビゲーション(使い易いシステムの構築)

2. 電子図書館への主なあゆみ

昭和60(1985)年 中型汎用機による電算化業務開始

昭和61(1986)年 調査研究室開設(館内措置) 文献情報センター目録システム参加

平成2(1990)年 KUINS(京都大学ネットワーク)第一期整備 OPAC開始

平成6(1994)年 「吉田松陰とその同志」展で「Ariadne」(電子図書館実験システム)による電子展示

平成7(1995)年 「蔵経書院本目録データベース」「維新資料画像データベース」作成 KUINS第二期整備

平成8(1996)年 京都大学附属図書館ホームページ公開 研究開発室設置(学内措置) 「今昔物語集への招待」展をインターネット公開

平成9(1997)年 電子図書館専門委員会設置

4. 電子図書館システムの進捗状況 - 「机の上に京都大学」の実現に向けて -

1) 国内外への発信情報

国宝 今昔物語集 553枚

重要文化財 7,126枚

兵範記(自筆本・古写本)、兵範記(新写本)、知信記 範国記、古今和歌集、新古今注、易学啓蒙通釈、易学啓蒙抄、易学啓蒙通釈口義、古文孝経、孝経述議 御注孝経、蒙求、塵芥、三略秘抄、史記抄、拾芥抄、宣賢卿字書、大学、中庸 長恨歌并琵琶秘抄、万葉集(尼崎本) 命期秘伝、六韜、六韜秘抄、論語(枝賢筆)、論語(良枝筆)、論語義疏、聚分韻略

貴重書 7,194枚

國女歌舞妓繪詞、烏帽子折草紙、玉ものまへ、四十二の物あらそひ、付喪神、義経記、源氏物語、源氏小鑑、源氏小鑑源氏物語音楽之事、岷江入楚、岷江入楚岷江御聞書、源氏詞清濁、源氏清濁、紫明抄、仙源抄、幼学指南抄、天正遣欧使節肖像画、室賀コレクション古地図 48枚、富士川文庫セレクト、365冊

41,160枚

維新資料 約14,900枚

奇兵隊日記、維新資料人名解説データ、樋口一葉作品（この作品は、万波前館長のボランティアによる力作です。）

闇櫻、わかれ霜、たま櫛、五月雨、經つくえ、うもれ木、暁月夜、雪の日、琴の音、花ごもり、暗夜、大つごもり、たけくらべ、軒もる月、ゆく雲、うつせみ、十三夜、この子、わかれ道、うらむらさき、われから、にごりえ

その他 蔵経書院本目録 京都帝国大学

富士川本目録（古医学書）

部局、事務局への電子化支援

京都大学百年史 総説編、部局史編、写真集

京都大学 - 研究・教育の現状と展望（総務部広報調査課提供）785頁

博士学位論文論題一覧（大学院審議会【平成10年11月24日開催】で了承済み）

Kyoto University Bulletin（総務部国際交流課提供）439頁 この提供により、外国からのアクセスが急激に増えた（主に米国等英語圏、韓国、台湾）

京都大学公式ホームページへのキーワード検索システムの提供

京都大学のトップ頁から15回以下のリンクを辿って到着するホームページ検索。

月2回ロボット収集。同義語、訳語検索が可能。

画像データは今年度で約14万枚提供の予定。

2) 学内向け配信情報

ネットワーク対応CD-ROM

CA on CD、MEDLINE、GeoRef、PsycLIT、BA、Zoological Record、雑誌記事索引、朝日新聞記事見出データベース、広辞苑、Oxford English Dictionary II .

電子ジャーナル（エルゼビア社 S-DOS）

35誌

外国語雑誌目次データベース（SwetScan）

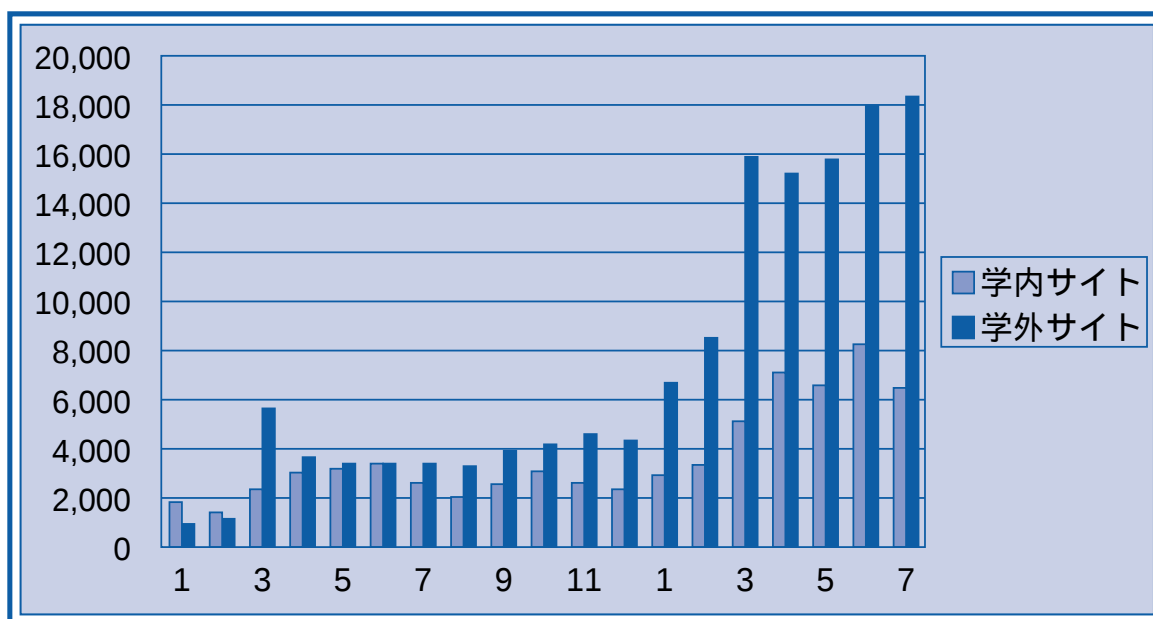
約18,000タイトルの目次データベース（SDI=E-mailによる自動配送システム、オンライン複写申込み機能付き）

3) 効率的な検索、利用しやすい環境の整備

テキスト系コンテンツを、全文、同義語、訳語検索システムを導入し効率的な検索ができるようにしている。また、図書のイメージで読める、付箋を貼る、必要な部分を朗読する、といった専用ブラウザを学内に配布した。

テキスト系データについては、自動翻訳機能（和・洋訳）が付いている。現在の翻訳能力は「高校1年生程度」といわれ、それほど信頼のおけるものではない。今後機能を高めたソフトウェアの開発・提供が重要になる。

4) 電子図書館利用サイト数 (1998.1 - 1999.7)



平成10年3月 オープニングセレモニー新聞記事に掲載される

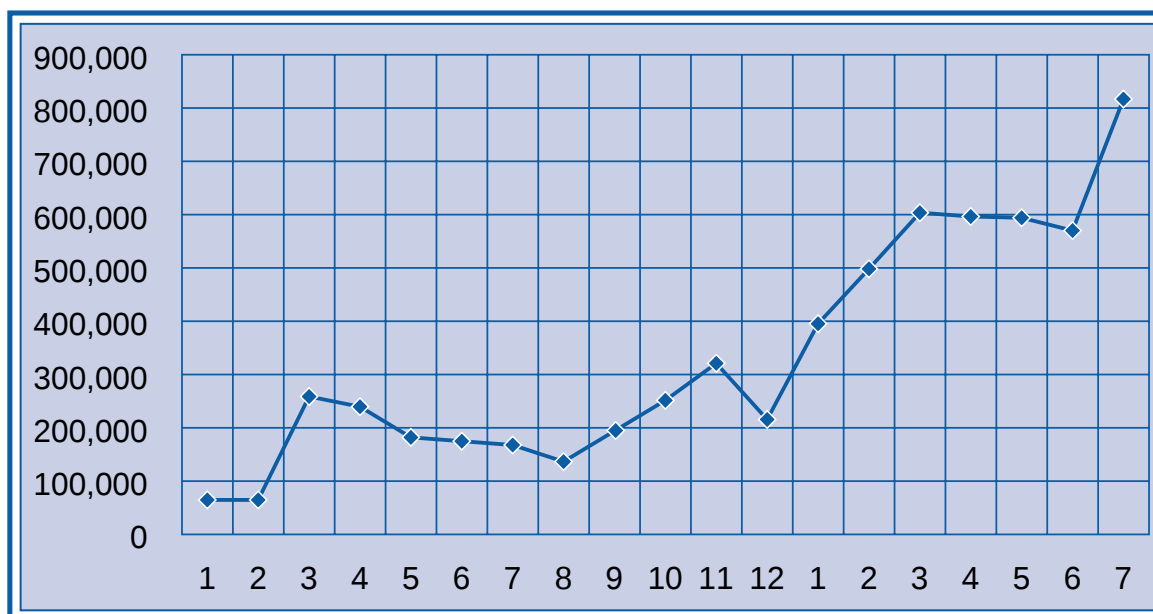
平成10年10月 テレビ朝日で放映される

平成11年1月 京都大学公式ホームページに、ホームページ横断検索システム提供

外国語雑誌目次データベース (SwetScan) 提供

* 学外からのアクセスが多いのが特徴。

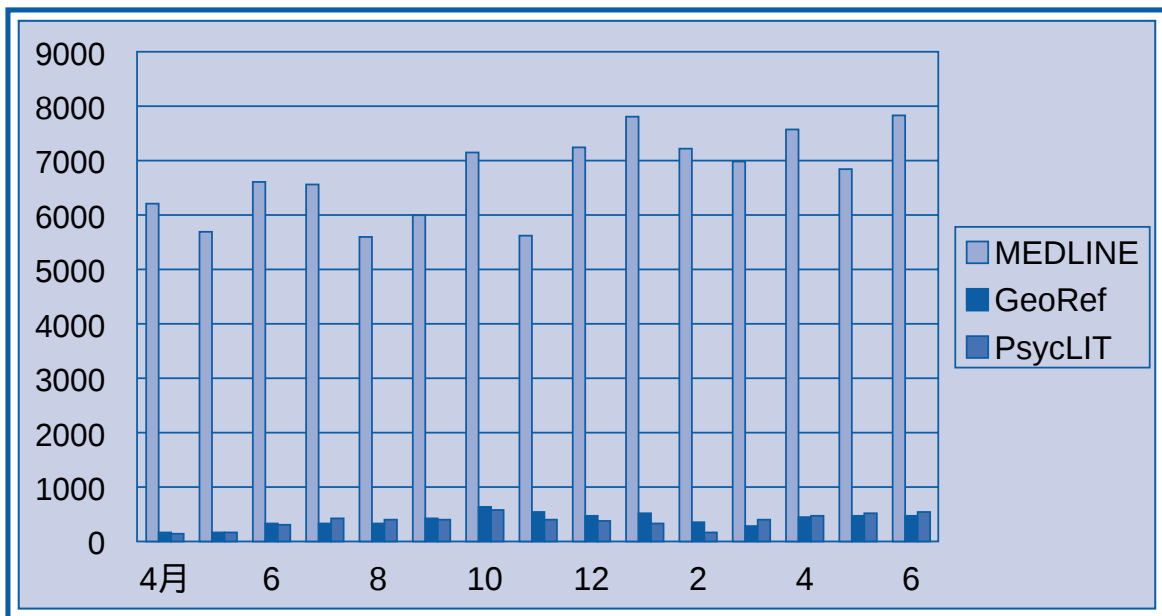
5) 電子図書館利用件数 (1998.1 - 1999.7)



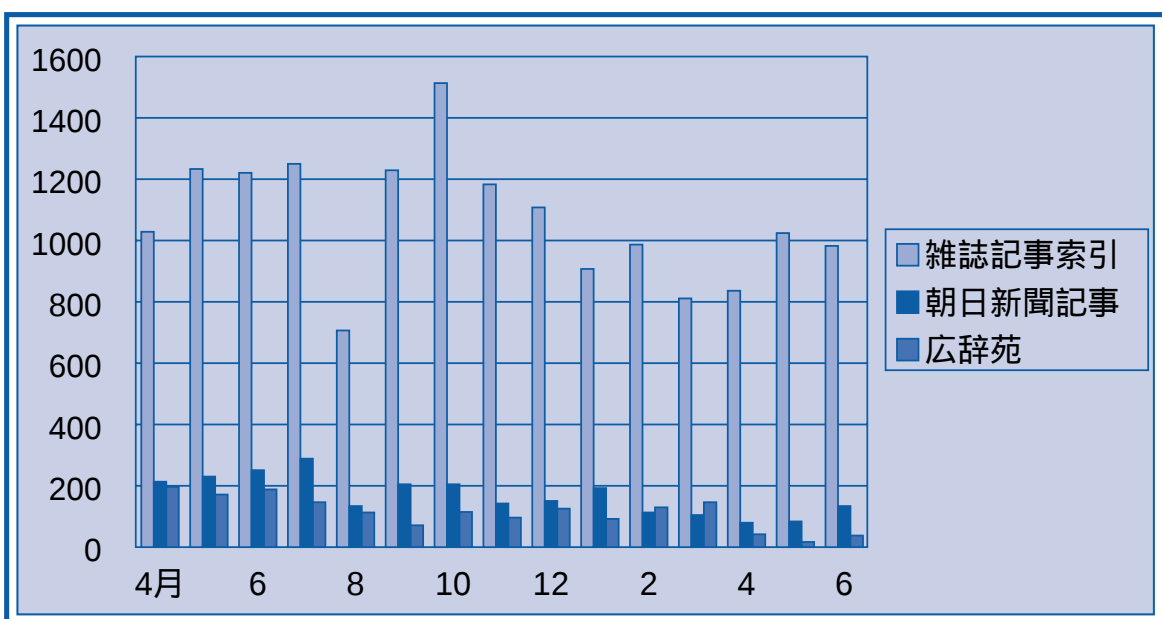
電子図書館利用件数 (平成10年3月1日～平成11年4月20日) 延べ約325万件、月平均約25,000件。海外からの利用 約130,000件 (4%) 米国など英語圏が中心。

その他、台湾 (約9,480) 韓国 (約2,600) 1～2回の利用は76ヶ国。ここ数ヶ月は月60万件から80万件あり、年間利用件数は飛躍的に伸びることが予想される。

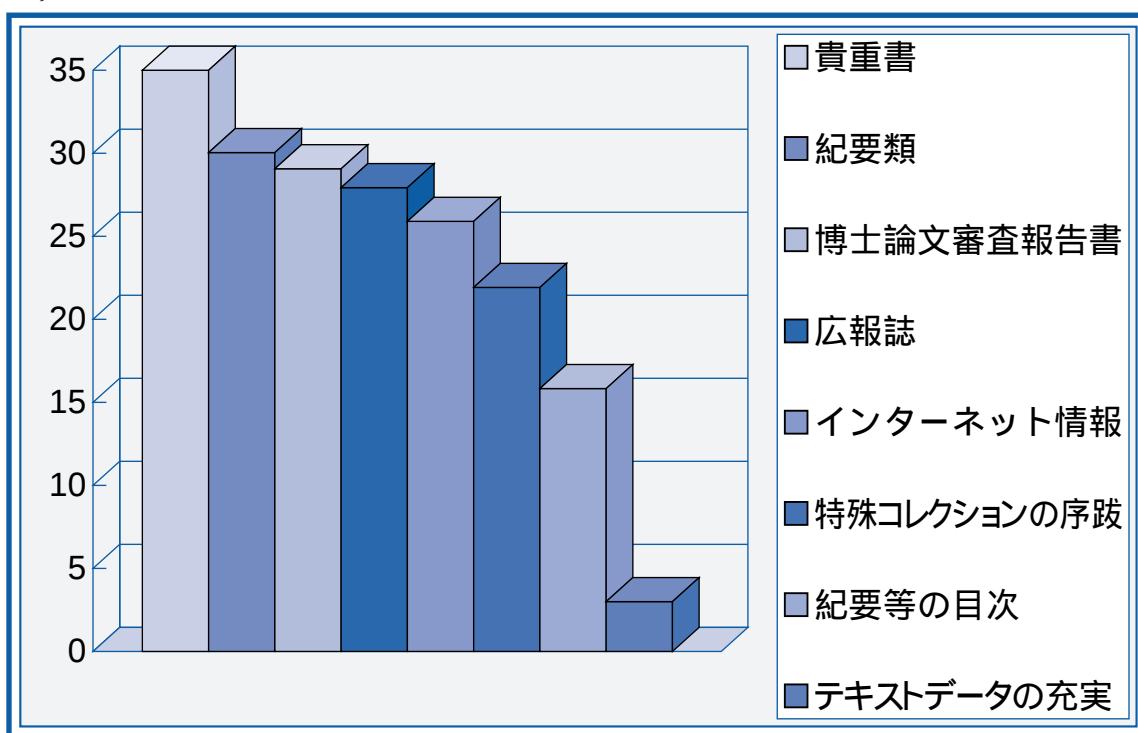
7) ネットワーク型CD-ROM利用状況 (1998.4 - 1999.6)



8) ネットワーク型CD-ROM利用状況 (1998.4 - 1999.6)



9) 部局調査 学内外に発信する情報として何が良いか

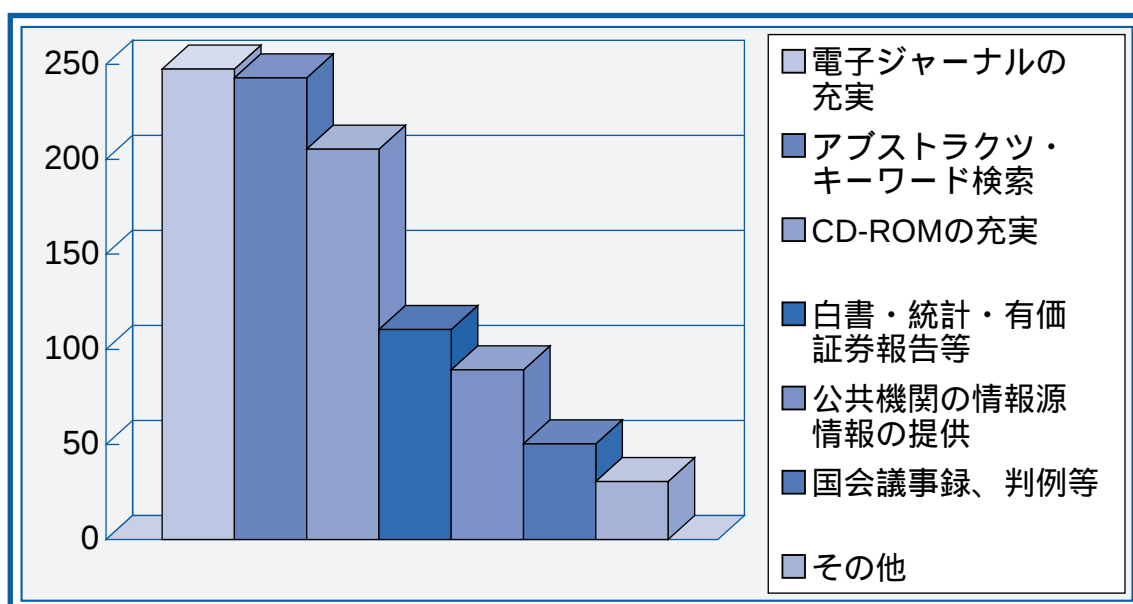


学内調査にもかかわらず、貴重書の提供が一番になった。

今後、博士論文の審査報告書の追加も検討課題になる。

テキストデータの希望が少ないことの分析が必要。

10) 部局調査 学内に配信してほしい学術情報等



5. 電子図書館システムの今後のあり方について

電子図書館専門委員会、同ワーキンググループで、中期展望を検討中。現在、部局調査を行い内容の分析をしている。その結果をもとに、さらに京都大学の情報を発信するためのコンテンツの種類等の検討を行う。

6. 学内の電子図書館システム利用環境

現在、京都大学の中には約1万台の端末があると言われている。総合情報メディアセンターでは、昨年全学に1,100台の端末を配置し、学生等の利用に供している。

附属図書館では、全学に電子図書館用端末を50台、業務用端末を210台、検索用端末60台を配置し、利用環境の整備に努力している。

7. データ作成

昨年度のデータ作成の外注部分については政府調達を行っている。そのため画像系データの基準作成のための調査を行った。データ作成に当たっては、かなりの部分を外注しているが、データの確認・チェック作業は文学部の教官から推薦された国史学等の大学院生に依頼している。そのため、作業が早くなり、正確な確認・チェックができています。

8. 連携協力体制のあり方

1) 京都大学学術出版会との連携・協力

京都大学学術出版会で出版している京都大学教官の著作物を、実験的に当面学内に限ってテキストデータとして電子図書館で提供。著作権処理は出版会が行う。

2) 国立大学図書館協議会での検討課題

平成10年の国立大学図書館協議会総会において「図書館電子化システム特別委員会」が設置され（本学は委員長館）、電子ジャーナル等のコンソーシアムや事務効率化、画像データの品質管理、著作権処理等の課題を検討中である。

3) 大学図書館に限らず、多くの図書館、美術館等で電子化資料の提供が始まっている。ネ

ットワーク環境が格段に進歩している状況を生かし、従来の省庁、国公私などの設置者の枠を越えた連携・協力ができるチャンスではないだろうか。

9. 電子図書館システム見学者数

平成10年4月～平成11年3月

見学機関	機関数	人数
国立大学	47	165
公立大学	12	75
短大・高专等	5	128
他省庁	7	11
国会図書館	6	6
共同利用機関	7	11
民間機関	4	38
その他	6	61
外国	13	150
合計	107	645

国別	機関数	人数
日本	95	498
中国	3	73
欧州	3	21
韓国	2	45
米国	1	2
その他	3	6
合計	107	645

10. おわりに

今年百周年を迎えた京都大学附属図書館は、他の国立大学附属図書館と同じように、予算減、定員減等の中で多くの試練に立たされている。独立行政法人化にどのように対応していくのかも、好むと好まざるとに関わらず近い時期に決断を迫られる。

従来型の図書館の発展と共に、電子図書館システムを発展させていくことは、今まで以上の知恵が必要になる。

とはいえ、全国的には非常に恵まれた環境を持ち合わせている図書館でもある。今まで培ってきた多くの先輩達の努力を基礎に、さらなる発展のために、館長を先頭に多くの先生方の力をいただき、職員一同一丸となって努力して行きたい。

（あさづま みよじ：附属図書館情報管理課長）